**聖観世音菩薩像**

東院堂の中には観音像が祀られています。観音は十一面観音や千手観音のように超自然的な存在として描かれることもあるが、この像はよりシンプルで魅力的な外観を持っています。髪は肩に流れ、体の動き、首回りの肉のひださえ、触れるかのようです。実際に、この国宝はしばしば日本で最も美しい観音像の一つと呼ばれています。

観音の「観」とは、通常は見えない、静かなものを見、聞くことを容易にする神聖な感知力を指します。実際、観音はしばしばこの力を使って、慈悲をもって地上のすべての存在を見聞き、必要な時に私たちのところに来る仏として知られています。

東院堂内の聖観世音菩薩像（「聖」は「神聖」を意味するが同時に「正統」も意味する）は、白鳳時代（645〜710）にまでさかのぼり、外部の影響を示唆する特徴を取り入れている点でもユニークです。その中でも、着ているサリーのような薄いローブは、足の曲線を描いています。さらに、観音の足と足首がはっきりと見えるので、日本の着物を着ているとは考えにくいでしょう。このような細部は、インドで見られる観音の作風を連想させます。

実際、薬師寺の多くの彫像は、他の奈良の寺院よりもインド様式に傾倒しています。薬師寺の観音や他の仏像が誰の作品に関するかの記録は残っていませんが、インドやスリランカなどの仏教国家から奈良にもたらされた工芸品に基づいて作られた可能性があると考える人もいます。